みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

A Limitary Report on Yang Zhai Feng-Shui in Kume Island, Okinawa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5590

〔論文〕

沖縄久米島の陽宅「風水」

——具志川村の事例の予備考察——

河　合　洋　尚

1．はじめに

動機と目的　沖縄では、屋敷、コミュニティ、方位観に関する研究が数多くなされてきたが、それらと密接な関連にある「風水」思想からの研究は、80年代まで考慮されないか、あるいは補助的に扱われてきた(1)。80年代以降、一連の優れた業績により、沖縄における「風水」知識の概要、および受容の歴史が次第に明らかとなり、「風水」研究は進展をみせたものの、未だにいくつかの課題が存在している。ここでは深く言及する余地はないが、さしあたり、現地調査に基づく研究が、相対的に少ないことのみ指摘しておきたい。つまり、現在の「風水」研究では、大部分が史料や風水書を対象としており、住民を対象とした、いまを生きる「風水」の思想と実践の報告は限られているのである(2)。たとえば、屋敷、コミュニティ、方位観を、詳細な聞き取り調査から報告した事例は、与那国における渡邊の研究(3)を含め、数えるほどしかない。

筆者が久米島において実施した調査は、その意味では、従来研究の不足部分を多少なりとも補うものになりうるだろう。調査は、2001年10月31日から11月10日まで、渡邊欣雄、劉正愛の両氏とともに、具志川村の西銘・上江州地区にて実施した。風水は、おおまかに分けて、住宅‐屋敷‐コミュニティを対象とする陽宅風水と、墳墓を対象とする陰宅風水とに分けることができる。現地では、筆者は主に前者を担当した。短い調査期間ではあったが、地区で「風水」知識に富むと村人達から考えられている6人のインフォーマント（以下、「識者」と呼ぶ）から話を伺うことができ、いままで報告されることのなかった、いまを生きる久米島の「風水」知識の断片が明らかとなった。

本稿は、主に6人の「識者」の「語り」に着目し、久米島の陽宅「風水」の紹介をしようとするものである。具体的には、住宅のレベルからコミュニティのレベルまで6段階を設定し、(1)方位判断、(2)日選び、(3)寸法および間取り、(4)門の位置と幅、(5)屋敷の形と位置、(6)村落共同体、に関連した「風水」知識を報告する。構成としては、まず調査地の概況を述べてから、次に陽宅「風水」の報告を行い、最後に、沖縄の「風水」研究にかかわるいくつかの課題を、要約的にまとめる予定である。その前に、久米島に風水思想が如何なる経由で導入されたのか、風水概念の簡介と併せ、述べておきたい。

風水と風水史　東アジアの社会・文化に強い影響力をもつ風水思想は、古代中国に始まる。起源は、春秋・戦国時代にまで遡るとされ、『詩経』には相地に関する一節がある。風水の語は既に漢代に見えるが、定義づけられたのは、晋代の郭璞に委託される『葬経』からである。この書によると、風水とは「風」と「水」であり、「気」の動きを操作するための地理的条件をいった。以後、「風水之法」は、環境を整えることによって、いかに良い「地気」を確保するかの方法論を指すようになる。『葬経』は、「風蔵水得」(4)の語や「気」の概念を生み出したことでも知られる。

4世紀以降、中国における文化の中心地は中原から華南へ移行し、風水文化も華南にて形成されることとなる。唐代に入ると、今日に伝わるような形での体系化が進められ、唐代中期のものとされる『錦嚢経』では「気」の流れが一体の龍神に比喩され、人間の吉凶禍福に影響を及ぼす「気」の凝集と拡散のありさまを、地上の景観から見分ける術が述べられている(5)。唐末になると、江西省にて楊筠松が「形勢学派」を、宋代には王伋が福建にて「理気学派」を創始するに至り、華南にて二大学派が登場した。「形勢学派」は、別名「江西派」とも呼ばれ、周囲の地形から風水の善し悪しを判断する。龍脈の論理に基づき、崑崙山に発する「気」の流れを想定して、山の形、水に流れを見るのである。他方、「理気学派」は、別名「福建派」とも呼ばれ、羅盤を使って周囲の環境を厳密に測り、理想の方位と地点を追求する。卦、十二支、星宿など、天体の運行原理に基づく手段を用いる。

やがて、明清代に入ると、理論上はともかく、実践面では両者の差が曖昧になる。「形勢学派」も羅盤を用い、「理気学派」でも地形を重視するようになった[6]。中国から沖縄に風水が伝えられたのは、この時期である。中国では後に、「迷信」の扱いを受けて弾圧・抑制されたが、いまでも社会・文化に強い影響力をもっている。

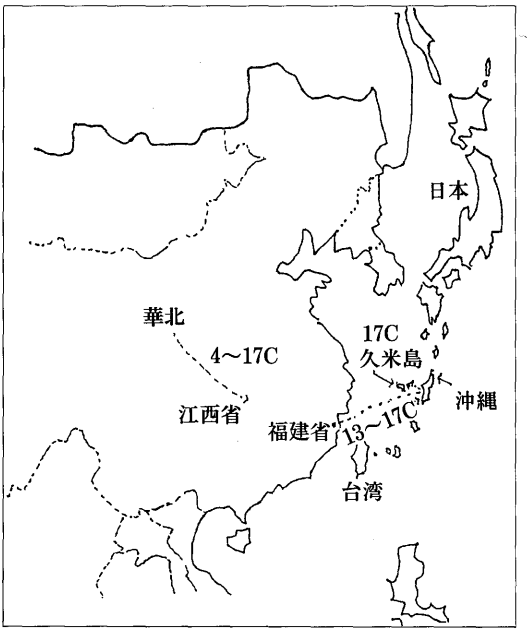

図1　風水思想の久米島への変容過程

さて、沖縄で風水思想がいつ受容されたのか。これについては、諸説[7]があり一定しないが、中国福建省への留学生を通じて、17～18世紀には広まっていたのは確かである。当時、風水思想は国策として用いられ、琉球王府の事業、村落、墓地などの立地にも役立てられた。そのため、留学によって高度な科学的知識である風水を身につけていた久米村の唐栄士族は、国家の重要なポストを担っていたのである。風水知識は、はじめは唐栄士族が、のちには民間識者たちが沖縄各地に普及させ、今日あるような生活知識となった[8]。

久米島では、早くも17世紀後半には風水知識が伝えられていたという。第一に、中国と沖縄本土との中継点に久米島が位置していたこと、第二に、久米島の地方役人がかつて風水に深い関心を抱いていたことが、久米島に風水知識を伝達させた主な要因となった[9]。かつて具志川村の風水が看られていたこと、重要文化財である上江州家が風水の原理から成ること、泰山石敢当の存在などが、風水の存在を物語っている。久米島において風水知識は、次第に地方役人から、サンジンソー（三世相）、大工に移り、民衆に定着していった。現在でも

「風水」は、人々の生活実践の中にみることができる。現地では、風水は「フンシ」と呼ばれていた。厳密にいえば[10]、本稿で対象としているのは、「フンシ」である。

2．調査地の概況

地理的位置　久米島は、北緯26度、東経126度の地点にある。那覇市のほぼ真西90kmに位置し、沖縄の島々の中では比較的広大な面積をもつ。霧島火山帯に属し、面積は6,333km²、周囲は48kmである。島の人口は9,550人、世帯は3,582世帯で、1世帯あたり平均3人弱という家族構成になっている[11]。

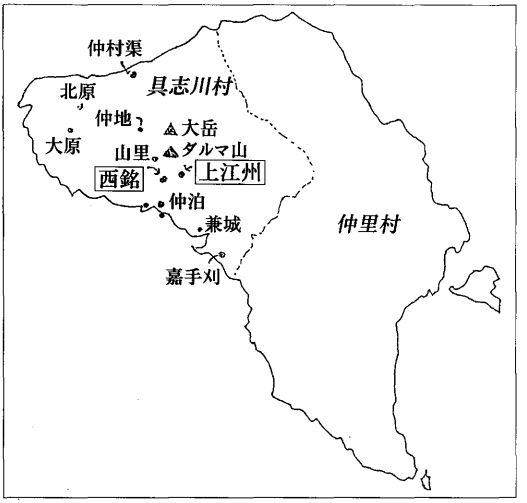

図2　久米島における調査地の位置

行政区として、いまのところ久米島は、東の仲里村と西の具志川村の、二つの村落に分かれている。具志川村はさらに、大岳、フソコ岳の麓にひろがる台地に位置する仲村渠、具志川、仲地、山里、上江州、西銘、久間地の各字と、大原平野の北原、大原、そして海岸沿いの鳥島、仲泊、大田、兼城、嘉手刈の14の字に分かれる。筆者を含む3人が調査した西銘、上江州の両地区は、山岳の麓にあるため、北側に行くほど高度が上がる。東北の方向にダルマ山を、北の方向には大城山を構え、南側は海に臨んでいる。

調査地の概観　調査地である西銘、上江州地区の景観については、図3に示した。上江州がより山側に、西銘が海側に位置している。図には太線で示したが、西銘公民館の西側の道は、尾根になっており、この道を基準に東西に分断される。調査した地区は、全体的に「集村」であるが、東側と西側では景観に

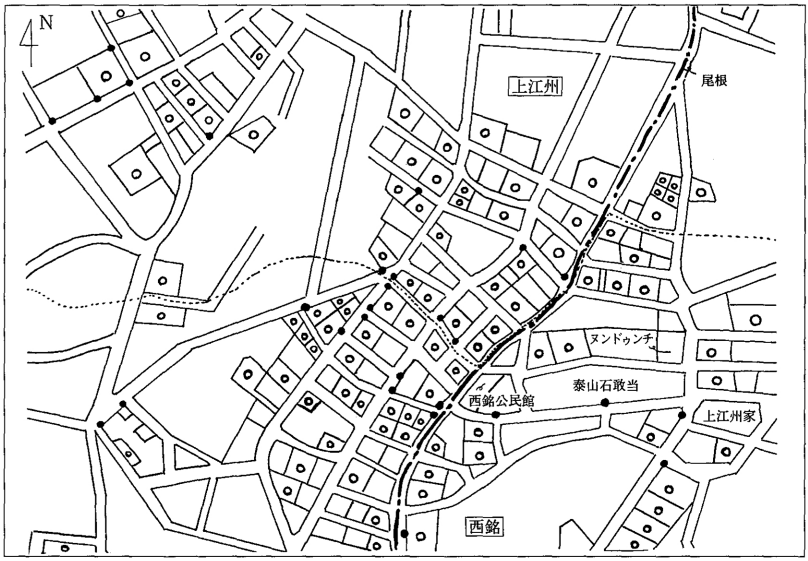

図3　調査地の景観および地形（○は人家、●は石敢当を示している）
出典：『ゼンリン住宅地図：久米島』(1999)

おいて多少の差異が見られる。東側は、1753年に建てられた重要文化財・上江州家をはじめ、赤瓦の古い住宅が比として多い。東側に少し離れた地点には、上江州8代目の墓など、2、3世紀前には建てられた古い墓も点在している。逆に東側は、西側に比べると新しい住宅が多く、コンクリート造りの住宅もいくつか見られる。集落の西側に少し離れた地点には墓が多数点在しているが、聞くところ大部分が100年も経っておらず、古くても明治期にしか遡れない。かつては東側が栄え、後に西側に中心が移行した史実の、ひとつの表れである。

屋敷の概要　概して、久米島の住宅は、沖縄で通常見られる形態に似て、床を張った居住部分（ウフヤ）と土間の炊事場部分（トングワ）からなる。ウフヤは東側にトングワは西側に位置し、この二つの部分が合わさることで、一つの住居としての機能を果たしている。両者は、南を向いている場合が多い。さらに、ウフヤには表と裏があり、表は東から一番座、二番座、三番座と名づけられる。一番座は、珍しい客人を迎えるなど神聖な空間であり、二番座は仏間と

なっている。三番座は最も位が低く、普段生活するのに主に使われる。裏は、ウラザと呼ばれ、主に寝床や物置に使われる。かつては、ウフヤとトングワを離して建てる分棟型が主流であった。現在では、分棟型の住宅は減少しているものの、トングワ部分をウフヤから突出部として、分棟型の痕跡をとどめている住宅も少なくない[12]。また、屋敷の周囲には石垣をめぐらし、その内側にフクギなどの樹木を屋敷林として植える。屋敷によっては、豚小屋と便所を兼ねるフールを屋敷内西側に配置したり、門と二番座の間にヒンプン[13]を備えたりしている。門前には、シーサー[14]が置かれる場合もある。

3．久米島における陽宅「風水」

「風水」知識の成層性　単純に区分すると、「風水」知識については、詳しい人とそうでない人の双方に分かれ、一見すると後者のほうが数としては圧倒的に多い。調査地における戸数は100余りであるが、村人達に「風水」知識に富むと思われる「識者」は、筆者の知る限りでは、せいぜい10人足らずである。残りの人は、体系的に「風水」を説明することはできない。「風水」についての質問を投げかけても、「よく知らない」、「フンシは歴史的なものだから、地域の歴史に詳しい人なら知っているだろう」、「あそこのお爺さんが詳しいから聞いてごらん」と、否定の声を返されることが大部分であった。

しかし、否定の声を投げかける村人でさえも、住宅や墓を造る際には方位や日取り等を考慮し、「識者」に相談していたことが調査を通して判明した。村人の多くは、「風水」とは何かについて体系的に語ることこそできないものの、生活知識の一部として「風水」を考慮しているのである。「風水」知識は、村落において成層性があり、知識の依存関係が存在する。依存関係が成り立つためには、依頼者と被依頼者の双方に、「風水」に関する知識がなくてはならない。従って、調査地における「風水」知識は、「識者」だけでなく、一般の村人にまで広く浸透していると考えるのが妥当である[15]。

「識者」簡介　少なくとも風水知識の調査おいて、風水があるべき理想のレベルで語られているのか、若しくは知識の依存関係をも含めた実践のレベルで

語られているのかの区別は、必要である。調査を通して筆者は、6人の「識者」たちによる「語り」が、村人達のみならず「識者」においてでさえ、実践のレベルでは必ずしも適用されていないことを知ることとなった。彼らの「語り」はある意味において理想のモデルなのである。それは、「こうあるべき」であるとか、「昔はこうであった」という話者達の考えがあらわれている。本稿では、序論で述べたように6人の「識者」たちの「語り」を紹介する。インフォーマントとして貴重なお話を提供していただいたのは、A氏（67歳、男性：西銘西在住）、B氏（77歳、男性：西銘東在住）、C氏（82歳、男性：西銘西在住）、D氏（76歳、女性：西銘東在住）、E氏（80歳、男性：上江州在住）、F氏（82歳、男性：西銘在住）の6人である。インフォーマントは、すべて65歳以上の高齢で大方は男性であるが、これは「風水」知識に富む人が65歳男性に偏るという久米島の状況をあらわしている。以下、「識者」たちの発言を筆者なりに統合することで、7つのレベルの陽宅「風水」を紹介していく。「語り」の内容は、理想のモデルが主であり、その全てが現地の「風水」実践に結びついていないことは、予め断っておきたい。データーは、「語り」の部位に関しては、すべて「識者」の発言に基づいている。

(1)方位判断

方位観　沖縄の方位研究において注意せねばならないのは、住民の考える方位と、われわれの考える方位にズレが生じるということである。前者は民俗方位、後者は自然方位と呼ばれる。自然方位は方位磁石などで判断される、西洋仕様の方位である。本稿では、両者を区別し、民俗方位の場合につき括弧に付した。ちなみに、久米島では、「東」をアガリ、「西」をイリ、「南」をヘー、「北」をキタと呼び、「東」と「西」の名称は、太陽の動きとかかわっている。

「語り」より　方位判断は、久米島の屋敷「風水」において、最も重視される。特に、南向きに家を構えるのがもっとも良い。事実、久米島の住宅の8割以上は南を向いている。しかし、「風水」判断によると、住宅の向きにはいくつかの禁忌が存在する。

まず、第一に、家の向きを正方位に向けてはならない。つまり、真東、真西、真南、真北には向けてはならないのである。久米島では真南に家を向けるのが理想であるといわれ、筆者もそのように聞いたことがあるが、この場合の「真南」は民俗方位を指しているのであり、一般にわれわれが指す南ではない。ほかの方位の場合も同様である。第二に、生まれ年の方位に家を向けてはならない。家族の成員の十二支を考慮し、それと重なる方位に向けてはならない。但し、家族全員の十二支を見るわけにはいかないから、実際には、戸主と長男の十二支さえ考慮されていればよい。第三は、住宅を、墓や御嶽（ウタキ）、拝所の方向に向けてはならない。自己の墓は家の「東」側に位置してはならないとされるが、同様に家は墓の「西」側にしてはならない。墓が「東」に、家が「西」にある状態で家が「東」を向いているのは、忌まれるとする。

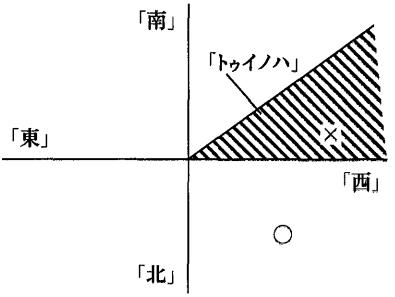

図4　「トゥイノハ」の方角は、久米島では特に忌まれる。

そして、どの「識者」も強調していたのが、家（墓も同様）を「トゥイノハ」の方向に向けてはならないということである。「トゥイノハ」とは「酉の方」を意味し、文字どおりの意味では西の方向を指す。ゆえに、曖昧な表現で、「西の方に家を向けてはならない」という人もいた。しかし、久米島でいう「トゥイノハ」は、単に西を指しているのではない。太陽の動きと関係しており、太陽の沈む方位であるという。つまり、久米島の民俗信仰がそうであるように、太陽の沈む方向を凶とし、その方向に家を向けてはならないとするのである。太陽の昇降と「トゥイノハ」向けの関連性は、C氏およびD氏の指摘するところである[16]。この場合、C氏やD氏が指している「トゥイノハ」とは民俗方位であり、われわれが普段使うような自然方位ではない。C氏の説明よるところによると、「西南」から「西」の間が「トゥイノハ」であり、最も危険な方角である。「西」から「西北」にかけては、太陽の昇降とかかわりがないため、家を向けてもかまわないという。

いまの時点で聞き取ることのできた方位判断に関する禁忌は、以上の4つである。基本的に、禁忌さえ守られれば、南側に向いていなくても良い。牛未の方角（南より少し西にズレる）が特に良いとは聞いたが、理想とされる方位に関しては、特に聞くことはなかった。方位判断は、専門家[17]が「カラハイ」（羅盤）を用いて行う。

(2)日選び

「語り」より　今回の調査を通して日選びは、いずれの「識者」によっても強調されることはなかったが、久米島では、屋敷を建てる際には、方位判断とともに看ることが望まれている。

日選びについては、第一に、ウルウルシ（うるう年）のときが良いとされる。これは、墓の建造に関しても同様であった。ウルウルシは、旧暦でもよく、いずれかが望ましいということはない。第二は、大安の日がよいとされる。ここまでは比較的単純な判断であるが、さらに専門的な日選びとなると、琉球暦が参照される。それによると、建築に良いとされる日選びは、第三に、琉球暦にある○の部分、特に「軫（シン）」の日である。琉球暦によると、逆に●の部分、つまり、赤口、二黒、七赤の部分は忌まれる。また、先勝の日には、二十八宿の中の血忌日、凶会日など、下段の●部分にあたる日も避けなければならない。日選びは、大工や易者、あるいはサンジンソー（三世相）に相談するのが普通だが、できれば自分で知識をつけて日を選ぶのが良いとされる。

(3)寸法および間取り

バンジョーガネ　家の寸法を測るとき、久米島では、「バンジョーガネ」と呼ばれるL字型のものさしを使う。これは、中国から伝わってきたものである。裏と表があり、表は普通のものさしだが、裏には特別な文字が刻まれている。文字は、長いほうの先から、「吉」、「害」、「劫」、「官」、「義」、「離」、「病」、「財」と書かれている。これを吉寸に合わせ、間取りを決めるのである。ただし、「バンジョーガネ」は誰でも使えるというわけでなく、60歳以上の人でないと、使いこなせる人が地区にはいない。住宅は、一に図面を、二に「バンジョー

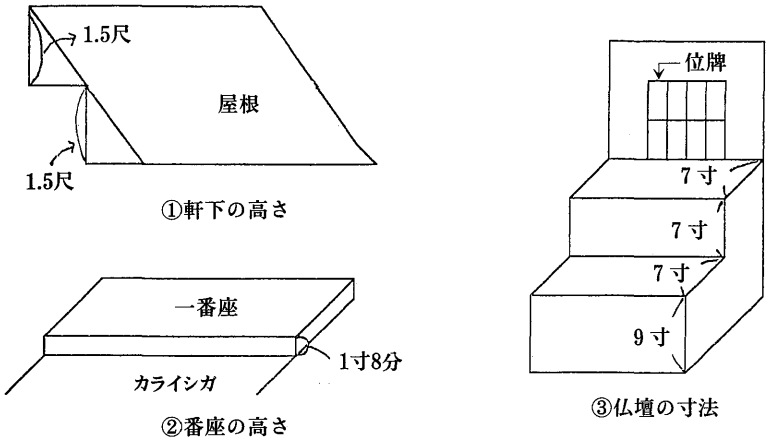

図5　家屋の寸法で最も考慮される部分

ガネ」を、三に位牌を祀る二番座を、最後に家全体を、手順として造る。

「語り」より　家の「風水」は墓の「風水」より重視されない[18]ため、すべての寸法を測るということはしない。かつての久米島では、家のほぼ全ての部分の吉寸を測っていたというが、いまでは半分も合えば良いとされる。家の寸法に関する人々の行為は、おおよそ次の二通りに分かれる。第一は、全く考慮しない場合。第二は、部分的に考慮する場合である。家の寸法に関しては、重要度が決められているため、後者の場合は、重要とされる部分だけ看る。その部分とは、一に軒下の高さ、二に番座の高さ、三に仏壇の高さである（図5参照）。

まず、軒下の高さは、地面からの距離でなく、軒下そのものの段差を考慮する。軒下は、大抵が複数の段を有しており、それぞれが奥にいくごとに1尺5寸あげると良い。重要文化財・上江州住宅は、実際にそうなっている。次に、久米島の住宅には、一番座、二番座、三番座が存在するが、これらと廊下の間には段差がある。この段差も、寸法の重要な対象となる。段差は、1寸8分あげると良い。仏壇は、高さだけでなく、各々の寸法も見なければならない。たとえばA氏は、自身の仏壇を例に、次のように説明する。「仏壇は、下段が高さ9寸で、奥行きが7寸。中段は高さ7寸、奥行き7寸になっている。位牌を

祀っている上段は決まりがない。7や9は魔除けの数字であるため、7寸や9寸にしている」。

筆者が家屋内の寸法について聞いた事例は他に二つある。ひとつは、部屋の間取りについてである。たとえばC氏は、一番座、二番座からトングワに至るまで、各部屋の縦横の長さを3の倍数で統一し、3尺や9尺といった寸法を、意識的につくりだしている(図6参照)。C氏は、これを「風水」ではなく「しきたり」であると主張する一方で、「風水」とも関係すると述べていた。また、家の間取りで、6尺に設計することは構わないが、6尺と6尺を重ねると不幸が起きるといわれている。住宅の高さは、5尺8寸にするのが理想的であるとされる。

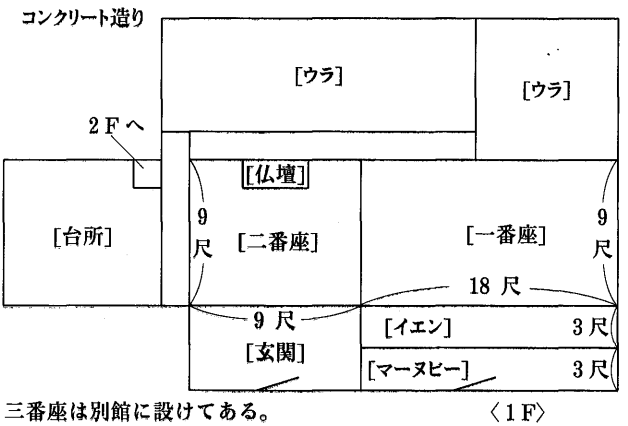

図6　C氏宅の間取りと寸法

間取りでは、寸法のほか部屋の広さも「風水」判断の対象になる。E氏によれば、8畳が金相の座、6畳が水相の座、4.5畳が木相の座、3畳が火相の座という具合に、各々の間取りが家の相に対応する。これによると、6畳と4.5畳は水と木だから隣り合わせにしてよいが、6畳と3畳は水と火で相性が悪いため隣にしてはならない。また、4.5畳と~~8~~3畳の組み合わせは、木と火が隣接することになるため、親子の不和を招くとされる。相の組み合わせで、畳の大小が決定されるのである。ただし、E氏の住宅に6畳と3畳の組み合わせがあったように(図7参照)、間取りは必ずしも住宅の「風水」に重要な要素ではなく、経済的な側面などで無視されうる。

もうひとつは、柱についてで、数と寸法が判断の対象となる。まず、数は奇数でなければならない。沖縄では、奇数が良い数字であるからである。また、

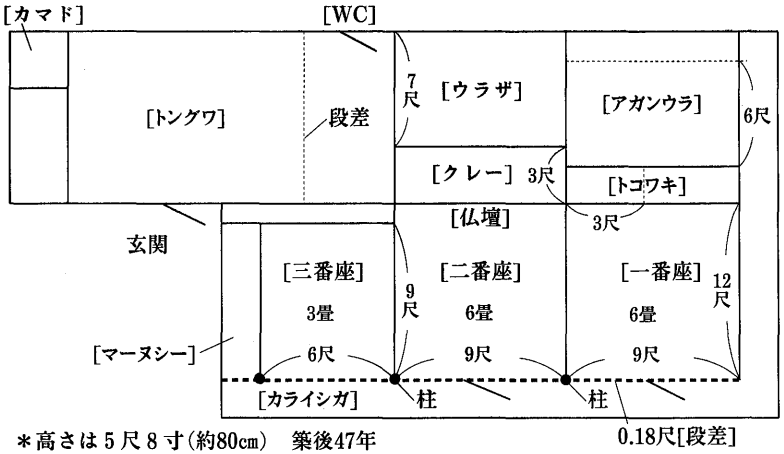

図7　E氏宅の間取りと寸法。軒下の高さ、番座の高さ、住宅の高さ、間取り、柱の数と寸法などは、おおよそ理想通りになっている。

柱間の距離は9尺にする必要がある。柱と柱の間は、「芯々間」、あるいは「上間」と呼ばれている。9尺にする理由は、数と同じく、奇数が魔除けの数字にあたるからである。

(4)門の幅と位置

ジョーグチ　屋敷への出入り口は、「ジョー」あるいは「ジョーグチ」と呼ばれており、玄関が重要な意味を果たさない沖縄では、門に相当する唯一の空間である[19]。本稿で記した門とは、久米島で「ジョーグチ」と呼ばれるものを指している。久米島では、一般的に門はひとつであるが、複数の門をひとつの屋敷に有している事例も少なくない。その場合、以下における説明では、正門を指している。

「語り」より　門は「風水」上、重要な箇所である。最近はあまり看なくなったが、判断のうえで対象となるのは、寸法、形状、向きの三点である。まず、寸法であるが、門の幅は9尺にするのが良い。9は奇数であるため縁起が良いからである。魔除けとなり、悪い影響力を防ぐことができる。門の幅を9

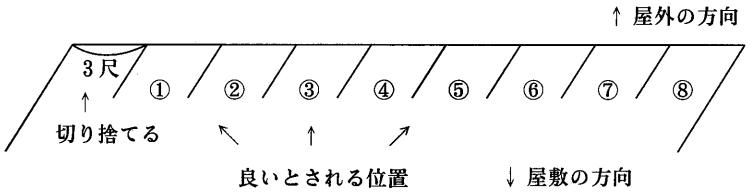

図8　門を開ける理想的位置

尺とるのは、久米島の「しきたり」であると、C氏は主張する。次に、門の形は、末広がりが良いとされる。つまり、逆八の字形になっていれば良い。そして、向きであるが、住宅の方位判断と同じく、正方位が忌まれる。たとえば、真西に門を開けたならば、災難が多発するといわれる。また、丑寅と寅卯の方角（東北の方角）も忌まれる。もしこの方位に門を開けたら、その家に住む人が早死にするといわれる。

久米島で最も理想とされる門の位置は、次のようである（図8参照）。まず、屋敷の敷地を、南に向かって左側から3尺を切り捨てる。その後、8つに区切り、①から⑧までの通し番号とつける。そして、①、③、⑤といった奇数にあたる部分を門にする。ただし、同じ奇数でも⑦の位置には門を開けてはならない。方位が「西」を向いているから、良くないのである。「西」側は第二、第三の門として開ける場合があるが、その時は、相対的に「不浄」の意味を付せられることが多い。

(5)屋敷の形と位置

「語り」より　屋敷の「風水」判断は、屋敷外部の要素とも関係しており、具体的には、屋敷を立地する地形、屋敷にかかわる水、屋敷そのものの形、屋敷を取り囲む道、他の屋敷との位置関係、の5点が看られる。

まず、どのような場所に家を建てるか。沖縄の諺にもあるように、背後にクサティ（山）を構えるのが最も理想的であるといわれる。従って、F氏など一部の話者は、屋敷が前側より後側の方が高くなるのが良いと述べる。しかし、屋敷の高低は、この地区では重要な要素ではなく、A氏やC氏、E氏のように

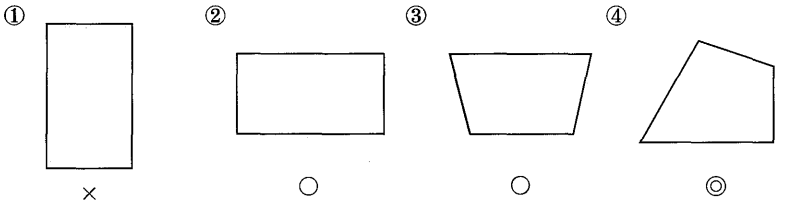

図9　屋敷の形状の善し悪しについて

屋敷の後側は必ずしも高くなくても良いと答える人の方が多い。E氏は、前側が低く後側が自然と高くなっている場所を「サン」と呼ぶと解説し、墓は「サン」に沿って建てられるのが理想的であるが、屋敷の方は「サン」に沿って建てる必要はないと主張した。また、久米島には、東側の方が高くなければならないとする考えはない。

次に、水との関係であるが、久米島では17Cから用水工事が行われ、屋敷の位置も用水の流れる場所に左右されてきた。調査では、今現在の屋敷地と用水との関係を聞くことはなかったが、大正時代に入るまで、用水の南側に家を構えることはなかった。屋敷の北を水が流れていると「腰が冷えるので家が繁栄しない」と言われたという。

屋敷の形に関しては、幅・長短ともにあまり考慮されないが、3つの良いパターンと2つの悪いパターンを聞くことができた（図9参照）。まず、久米島の屋敷は方形であることが多いが、E氏によると「マッチ型」の屋敷は良くない。つまり、①にみるような、奥に長い縦長の屋敷は避けられる。方形の場合、②のような横長の屋敷が良いとされる。また、③のように後側が前側より長い屋敷もよい。ただし、逆に、前側が後側より長くなるのは良くない。理想とされるのは、④のように、西側が尖っている屋敷である。E氏の話では、西側は女の方向であり、この方向がへこんでいると女性の運が悪くなるので、なるべく避けたほうが良いという。

家を建築する場合は、周りの道との兼ね合いも考慮に入れなければならない。道との関係の場合、理想とされる像はないが、避けなければならないパ

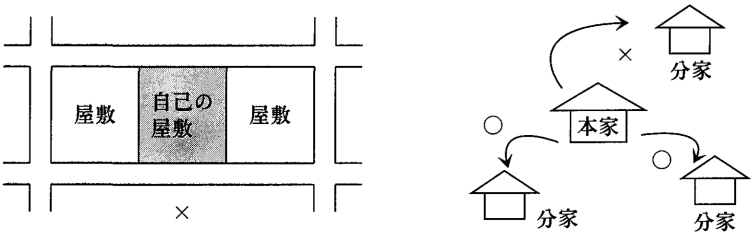

図10　屋敷間の理想的な配置

ターンは二種類ある。第一は、屋敷の周囲を道路に囲まれるパターンである。この場合、四隅に橋かアンキョウ（排水管）を設置して、対処する必要がある。第二は、東に屋敷より高い坂道があるパターンである。この場合、「フンシゲージ」として屋敷の東側に池をつくればよいとされる。東に坂道でなく大道路があるパターンは、凶であるとはされない。

最後に、屋敷と屋敷の位置関係であるが、これも避けられるパターンが二種類ある。ひとつは、図10に示したように、二つの屋敷の間に、自身の屋敷が挟まれてはならないとする事例である。両側の屋敷の勢力におされてしまうから良くないのである。もし真ん中になってしまったなら、両脇にコスジ（小道）をつくるべきとされる。もうひとつは、分家－本家の関係にかかわる。久米島では、子供が成長して結婚すると、最終的には長男が残り、次男以下は分家する。そのため、本家－分家関係があらわれるのだが、両者の間には、空間配置についての序列ができる。原則的には、分家は本家の後側、つまり高い場所に位置してはならないとされる。

(6)コミュニティの「風水」

「語り」より　西銘は「風水」が良いとよくいわれる。また、F氏の話によると、西銘には龍脈が通っていると、かつては噂されていた。特に、西銘の東側は「風水」が良く、上江州家やヌンドゥンチなど、旧家や聖地が集中している。上江州家は、「風水」の原理によって構成されたことが証明されている[20]が、ヌンドゥンチ[21]もまた「風水」と関係している。この地域では、生まれた

ての赤ん坊を連れて参拝するという習俗があるが、それはヌンドゥンチの「風水」が良いため赤ん坊が育ちやすいとする考えに基づくだろうとC氏は語る。「風水」は、人間に非常にためになるものだから、赤ん坊の成長に大いに関係しているのである。また、ヌンドゥンチには石が三つあるのだが、その上で穀物を焚きつけてご飯を食べると、健やかに成長するという言い伝えがある。ヌンドゥンチは、赤ん坊から大人まで、成長する源なのである。少なくとも、上江州家とヌンドゥンチが「風水」と関わるとする意見は、ほとんどの「識者」が主張するところのものである。他にも、上江州地区の最も山に近いあたりは「風水」が強いといわれる。E氏の話では、この辺りに人が住む際には、注意が払われたという。

4．おわりに：要約と展望

本稿では、久米島における「風水」知識を、数人のインフォーマントの認識からとらえようとした。その結果、住宅からコミュニティのレベルまで「風水」知識が関わっていることが、明らかとなった。調査では、「識者」のいう理想とされるモデルに焦点を当て、それが実際の「風水」実践にどれだけ反映されているかをみていない。また、地域的にも限られている。しかしながら、そうした不十分さは認めるにしても、今後の研究につなげうるいくつかの課題を、要約的に提起しておきたい。

第一は、久米島の屋敷の造りや村落景観が、ある程度「風水」の観点から読み解けるとする可能性である。たとえば、20年前に久米島で実施された建築系の調査では、四方を道で囲まれた住宅が1％と極端に少ないこと報告している。これは、四方を道で囲まれた住宅は良くないとする、「風水」上の原理と符号するものである。また、なぜ久米島の住宅の間取りに3尺－6尺－9尺といった寸法が多いのか。これについても、「風水」上の説明を受けていなければ、理解が困難である。本稿では、住宅を正方位に向けることへの禁忌、墓や御嶽に向けることへの禁忌、「トゥイノハ」に向けることへの禁忌といった方位判断から、屋敷の形状や本家－分家間の配置に至るまで、「風水」知識が関係していることを明らかにした。実際に、いくつかの住宅では、「風水」に

よって屋敷の造りや村落景観が決定されている。

第二は、現地調査を通して得た「風水」知識と、史料や風水書に記載された風水原理とが、相補的に参照できうるとする可能性である。本稿から事例をあげれば、西銘村落の龍脈説が該当する。都築晶子は、西銘における形勢論として、ダルマ山から大城山を経由し上江州家周辺を通る龍脈の流れを『家記』より明らかにした[22]が、この説明は何も史料だけのものではない。これらの場に龍脈が通るとする話は、いまでも耳にすることがある。史料および風水書に書かれた事項は、現代においても確認することが可能なのである。逆に、なぜ上江州家やヌンドゥンチが「風水」と関係しているのか、なぜ西銘の東側がかつて栄えていたのか、なぜ上江州の山側の「風水」が強いといわれるのか、現地調査における疑問点を史料から裏づけすることもできる。また、久米島の風水書には、「福建派」の理論についてまとまったものが多くみられるというが、現地でも地形判断よりは方位判断のほうが重視される傾向がみられた。

第三は、「フンシ」と呼ばれる久米島の「風水」知識が、中国の風水思想にはない、独自性を有す可能性である。本稿であげた事例のいくつかは、中国の事例とも共通性があるが、筆者の知る限り、現地調査からはまだ報告されていない事例も中にはある。その一例が、奇数信仰の「風水」との関わりである。先にも述べたとおり、9尺など奇数尺は、必ずしも吉を指すとは限らない。にもかかわらず、仏壇の寸法から間取りの寸法、門の寸法、柱の数や芯々間に至るまで、久米島では奇数を好んで用いる。これは、奇数を魔除け、幸運の数字と考える久米島の習俗の影響である故と、「識者」達は考えている。中国では、奇数を陽、偶数を陰とする習俗があるため、奇数信仰と「風水」の関連性は中国にないとは断言できないと筆者は考えるが、いまのところ調査報告が見当たらないため、久米島独自の信仰である可能性も否定できない。他には、「トゥイノハ」向けの禁忌が、久米島固有の信仰と結びつけられている可能性がある。

第四は、久米島の「風水」思想が、日本本土のそれと、ある程度の類似性をもつとする可能性である。たとえば、久米島には分家が本家より後方にあってはならないとする観念が存在したが、筆者は同様の観念を、長野県小諸市の調

査でも聞いた。また、小諸市では、西を凶とする観念が存在するが、この点でも久米島の事例と類似している。小諸市でも方位は重要な要素であり、不幸が起きないための方位判断がなされるし、不幸が生じた場合には住宅の向きが変えられる[23]。久米島ではまた、池が不幸を避ける手段として使われていた。小諸市では、逆に池が不幸を呼ぶ要因としてみなされている。沖縄の「風水」と日本のそれとは、区別されるのが通例であるが、以上の事例を考慮すれば両者を完全には区別できないとも考えられる。

いまの沖縄の「風水」研究では、特に第三、第四の項目、つまり、住宅・コミュニティと「風水」との関係を、中国や日本と比較する視点が欠けている。その理由としては、ひとつは沖縄における現地調査の不足があり、もうひとつには、中国や日本（特に後者）においても比較に足りるほど十分な現地調査がなされていないことがあげられる。「自然」と「文化」を対立させず、不可分かつ相補的な関係におく思考が風水であるとするならば、風水的思考は、人間の吉凶が自然の影響を受けるとし、建築の際に自然にはたらきかける久米島の人々の中にも存在する。同様のことは、中国や日本についてもいえる。久米島だけでなく、中国ならびに日本を視野に含めて研究する必要性を指摘することで、本稿を結ぶことにしたい。

【注】

（1）渡邊1990：159。

（2）渡邊の指摘（2001）では、沖縄において、史料や風水書に基づく「テキストの風水」と、近現代の話し手からの聞き書きに基づく「コンテキストの風水」に差異が見られるという。従って、「風水」研究は、双方から捉える必要がある。

（3）渡邊1993：144－185。他には、原の与那国調査（2000）など、現地調査に基づく研究が、いくつか存在する。

（4）「風を蓄え、水を得る」。立地の際に、良い自然環境を選択する術が述べられている。

（5）都築1990：24－25。

（6）いまでも福建省では、両派が並存しており、状況によって使い分けている。

（7）沖縄への風水受容は、1667年、周国俊国吉通事が福建省に渡り、「地理」を学んで帰ったのが始まりといわれる。しかし、中国からの渡来人である唐栄人により、

1650年には沖縄に風水知識が伝えられていたとする文献もある。また、1392年の閩南人渡来以降とする説も少なくない。

(8) 渡邊1990：160。

(9) 横山・都築1999：1、上江州1999：7。

(10) 「フンシ」は、明らかに中国の風水思想の影響を受けているのだが、沖縄の「風水」は中国の風水と必ずしも一致しないとする指摘（渋谷2000）もある。従って、本稿では、沖縄の風水に限り、括弧にくくって表記した。

(11) 『都市データーブック2002年度版』（東洋経済新報社）より

(12) ある「識者」が主張していたように、「コンクリート使用の家でも、民家の間取りは以前の木造民家と同じである」ことが多いため、赤瓦の古い民家からコンクリート造りの近代的な住宅まで、広範囲に適用できる。

(13) 住宅の門の間にあって、住宅の視界を遮るための建造物。通常は四角形の石壁が使われるが、木で代用される場合もある。中国では、「殺気」除けが目的で設置されていることが多いのだが、久米島では同様の声をまだ聞いていない。最近は、自動車の出入りに不都合なため、撤去される傾向にある。

(14) 獅子の形をした建造物。一般的には魔除けのために設置される。「識者」のうち数人は「アクフーゲージ」、つまり「殺気」除けの建造物であると見ていた。いまでは門の正面に一対置くのが慣例となっているが、もともと屋根に置くのが普通である。口の開いている方がオスで、閉じている方がメス。屋根の上に乗っているシーサーはオスである。門前に置くようになったのは、那覇のある村でおきた事件が原因であるという。

(15) 調査地の風水意識に関する統計は、まだとっていない。今後の課題としたい。

(16) 「トゥイノハ」は民俗方位であるため、年間を通して変化しうる。なぜなら、太陽の昇降地点は、時期により変わるからである。従って、実際の方位計測に、「トゥイノハ」向けの禁忌が如何にかかわっているか明確ではない。本稿で紹介したのは、話者の意識の上での問題である。実践面での「トゥイノハ」向けに関する詳細な報告は、今後の課題としたい。

(17) 地区では、「風水」を看る人がいるが、彼らは「風水」判断を専業としていない。また、「風水師」、「地理先生」、「陰陽先生」、「六時先生」に相当する言葉でも呼ばれていない。

(18) たとえばA氏は、「家はともかく墓はその人の運命を破壊しかねない」と父親に忠告されたため、墓の「風水」判断はしないという。家は一時の住処であるが墓は一生の住み処であるとする観念は、久米島においても存在する。

(19) 赤嶺1999：145。

(20) 東京都立大学・渡邊欣雄教授と同大学・何彬助教授による。

(21) 上江州付近にある拝所。「祝女殿内」と書く。

(22) 都築1999：52－54。

(23) 住宅そのものを変えるのが困難である場合は、玄関口など内装を変える。こうした事例は、香港や福建省でも報告されている。

【参考文献】

赤嶺政信　1999 「屋敷と門」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(科学研究費成果報告書)

Baker, H.D.R　1979　*Ancestral Images: A Hong Kong Album,* Hong Kong: South China Morning Post.

De Groot, J.J.M　1897　*The Religious System of China, vol.3,* [牧尾良海訳　1986『中国風水思想――古代地相術のバラード』第一書房]

Eitel, E.J　1873　*Feng-Shui: The rudiments of natural science in China* [中野美代子・中島健訳　1999『風水――欲望のランドスケープ』青土社]

具志川村史編集委員会（編）　1972 『具志川村史』具志川市役所

原　知章　2000 『民俗文化の現在――沖縄・与那国島の「民俗」へのまなざし』同成社

何　彬　2000 「住まいと風水」『大地は生きている――中国風水の思想と実践』[聶莉莉・韓敏・曽士才・西澤治彦編] てらいんく

何　暁昕　1990 『風水探源』[宮崎順子訳　1995『風水探源――中国風水の暦史と実際』、人文書院]

河合洋尚　2001 「沖縄久米島の住宅風水」『とぅんばらー通信』二一

劉　正愛　2001 「久米島の墓風水に関する調査報告」『とぅんばらー通信』二一

三浦國男　1995 『風水――中国人のトポス』平凡社ライブラリー

宮澤智士　1999 「沖縄県の民家概説」『日本の民家調査報告集成――九州地方の民家(2)　熊本・宮崎・鹿児島・沖縄』東洋書林

武者英二　1999 「久米島民家の空間構成について」『日本の民家調査報告集成――九州地方の民家(2)　熊本・宮崎・鹿児島・沖縄』東洋書林

Nnapp, R.G.　1986　*China's traditional rural architecture: A cultural geography of the common house,* University of Hawaii Press.

渋谷　研　2001 「書評―民俗文化の現在」『民族学研究』六五－四

徐思淑・周文华(編)　1998 『城镇的人居环境――云南城镇人居环境的传统经验与继承发展研究』云南大学出版社

都築晶子　1990 「近世沖縄における風水の受容とその展開」『沖縄の風水』[窪徳忠編] 平河出版社

--------- 1999 「久米島の風水文書をめぐって——方位論と形勢論」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(科学研究費成果報告書)
上江州均 1999 「久米島の民俗にみる中国文化の影響」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(科学研究費成果報告書)
渡邊欣雄 1990 『民俗知識の課題——沖縄の知識人類学』凱風社
--------- 1990 『風水思想と東アジア』人文書院
--------- 1994 「沖縄の屋敷風水——風水知識からみた民家論」『風水論集』凱風社
--------- 1994 『風水——気の景観地理学』人文書院
--------- 2000 「風水」『日本民俗大事典』吉川弘文館
--------- 2001 『風水の社会人類学——中国とその周辺比較』風響社
横山俊夫 1999 「久米島具志川の日選び」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(科学研究費成果報告書)
---------・都築晶子 1999 「研究成果報告」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』(科学研究費成果報告書)

〒192-0355 東京都八王子市堀ノ内3-30-1-405